

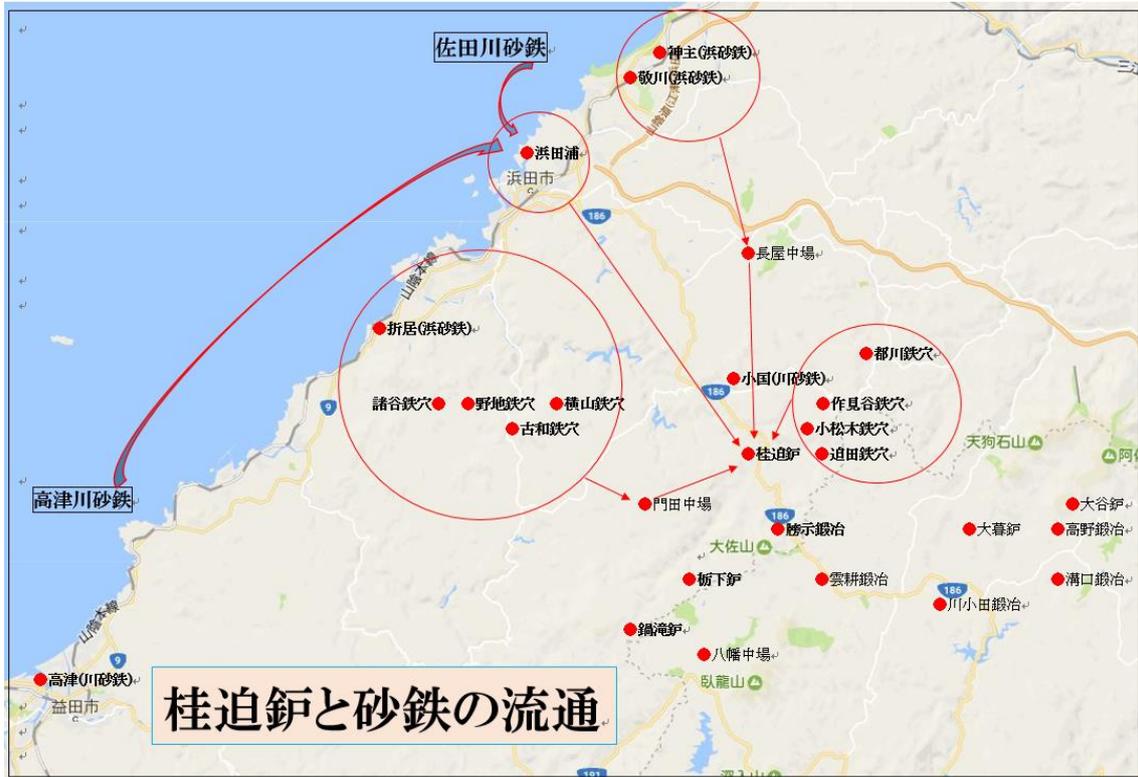
企画展「波佐地方における『たたら製鉄』と地域経済」に寄せて

会 場：浜田市金城歴史民俗資料館

会 期：平成 29 年 7 月 1 日(土) ～ 平成 30 年 3 月 31 日(土)

開館日：土・日曜日（開館日以外の場合は、前日までに予約をお願いします。）

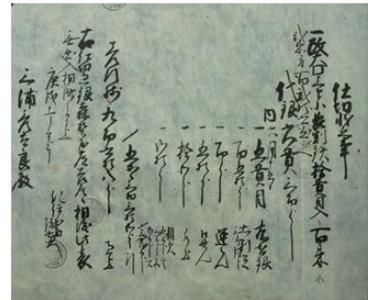
※予約受付 TEL 090-4697-2818



桂迫鉦と砂鉄の流通

黒金の流通

銑鉄買付業者名	
出羽酒田	紀伊国屋弥左衛門
越中高田	清五郎
筑前博多	西崎常四郎
	石州屋藤三郎
柳川小保	石見屋虎次
肥後小島	石見屋平右衛門
肥後高瀬	湊屋喜一郎
	志波屋嘉平
	岩岐屋嘉平
長門赤間関	佐野屋熊治郎
三田尻	布代屋三四郎
	宮津屋保右衛門
	岩見屋平三
大坂堺	隅廣屋



※ 桂迫鉦所で生産された銑鉄は、浜田港から北前船で全国へ搬送された。

古来より脈々と受け継がれてきた「たたら製鉄」は、平安末期には長田別府(浜田市金城町長田)の主税として「黒金」が年貢注文されていた。下って、源平合戦、南北朝時代の「波佐谷の合戦」、戦国時代の毛利・尼子・吉川の戦乱をとおしても、たたら鉄を巡って、幾多の攻防の戦火をくぐってきた地域である。

江戸時代になって、たたら製鉄は、民営で操業されるようになった。地域産業の要として、たたら製鉄の発展があった。地域農民も、馬を飼育して、駄賃稼ぎで、副収入を得て、村民は、豊かな生活を送ることができた。紺屋一つを例にとっても、村が豊かでないといと藍染経営もなりたないののである。

江戸時代後期の石見地方におけるたたら製鉄の盛衰を「鍋滝鉦」、「栃下鉦」、「桂迫鉦」の3つの鉄山の経営を通して、経営者であった三浦彦太郎・古和定助等の、当時の「たたら製鉄関連古文書」4,200点によって理解することができる。

三浦彦太郎と古和定助は、波佐村の大水害と飢饉によって地域民の生活困窮を緩和させるために桂迫鉦を開設し地下農民の生活支援を行った。両者は、この鉦経営で資産を蓄え、古和氏は、住宅を新築し、多くの山林を手に入れた。三浦氏は、加計の隅屋、佐々木八右衛門から鍋滝鉦の所有権を買い取る資金に充て、自ら鍋滝の泊小屋へ住まいを移し、鍋滝鉄穴、泊小屋の鍋滝鉦所、鍛冶屋を開設して、繁栄した。後に、三浦は、栃下鉦所も経営した。古和氏は、桂迫鉦所を引き続き経営した。

これらの「たたら文書」資料から判明したことは、広島県加計の隅屋(佐々木八右衛門)、庄原の釘屋(香川喜三郎)が石見地方へたたら製鉄の経営で進出した経緯と、地元での、たたら製鉄産業の波及を知ることができる。

鉦場の経営者が直接鉄穴場の経営を行っている小松木鉄穴、都川の政ヶ谷鉄穴の例もある。鉄穴流しの行われた鉄穴場は、地主と契約を交わし、下流域の承諾を得た後に、砂鉄採集が行われていた。鉦所へ購入された石見地方各地の砂鉄は、三隅の諸谷、古和、折居、横山、神主、敬川、都川、小国など浜砂鉄なども含まれている。これらの砂鉄運送ルートも資料から知ることができる。諸谷や横山からは、門田中場を経由して、波佐中場に運ばれ、周辺の鉦所へ分配される。波佐中場から広島県の八幡中場へ中継され加計・隅屋の経営する山県郡内の各鉦所へ分配された。

小松木鉄穴(明治8年の記録)の抗掘範囲は2,100坪(6,930㎡)7反歩。90日間 で5,135貫目(19t 256Kg)。830人夫、代価530円40銭。掘出し、420人 110円77銭8厘、一日6人。精錬410人、519円49銭、一日20.5人。鉦区税 1円5銭。単価、掘出し=26銭4厘。精錬=1円26銭。

鉦所の開設に先立ち、風水によって鉦の方位、勘場の部屋割りを方位で表し、見立てていたことも今回の資料調査で解明された。

ほとんどの鉦所の吹小屋は角打であったが、桂迫鉦所は、丸打であったことが判った。勘場も鉄蔵、帳場、くど、せついでん等も風水で吉凶を見立てていた。

長割鉄に仕上がった銑鉄は、仲買業者の手を経て北前船で、北は山形県酒田、南は熊本県高瀬まで流通された。最盛期は、弘化、嘉永、天保年間であった。栃下鉦(慶應元年)の年間生産量は、銑が15,032貫目(56t)。鋸が4,514貫目(17t)。銑鉄の流通先は、栃下鍛冶場、芸州溝口鍛冶場、大暮鍛冶場、高野鍛冶場、川小田鍛冶場、雲耕鍛冶場へ広島への流通が主であった。

時代は下って、明治8年の「鉄山不景気ニ付儀定書」によると石見地方の鉦所、鍛冶屋の数を知ることができる。

今回の企画展は、たたら文書 4,200 点によって鉄山の仕組み。砂鉄の流通経路。銑鉄の全国流通。鉄山の金屋子信仰。鉄山関係者の往復書簡で物・金・人の流れなどを中心にパネルを新調して、展示を行っています。

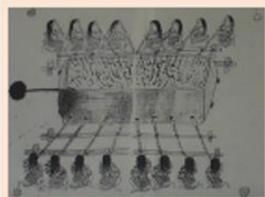
江戸末期における石見地方・芸北地方全体の「たたら製鉄」の歴史的解明の一助になれば幸いです。

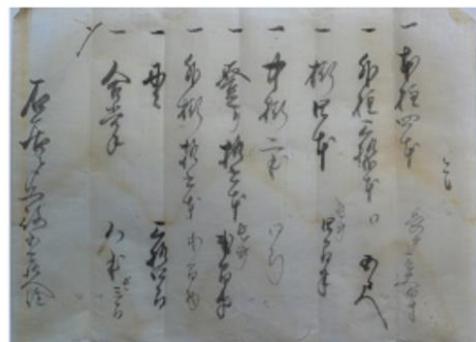
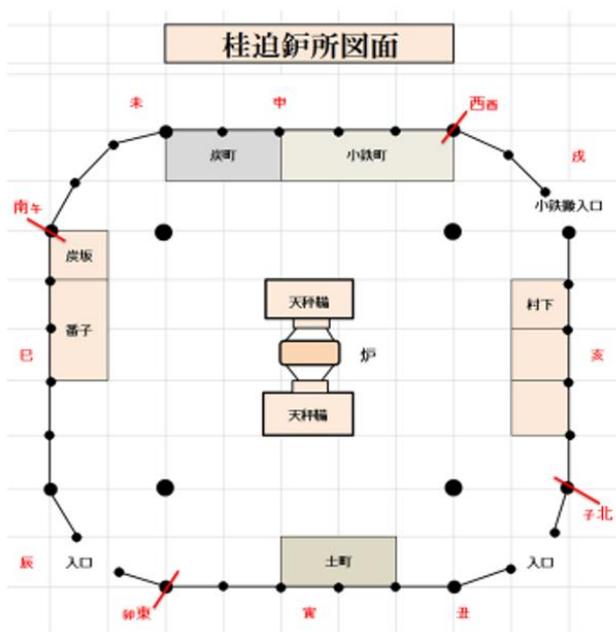
平成 29 年 7 月 1 日

浜田市金城歴史民俗資料館

たたら製鉄の歴史

野たたら → 吹子たたら → 鞆たたら → 天秤鞆たたら

<p>①</p>  <p>日本における古代のたたらは「野たたら」と称されているが、外国では、皿たたらと呼ばれている。</p>	<p>②</p>  <p>3m60cmの火吹き竹(径5cm)を口に当て、16名の吹子が一斉に炉に風を送り鞆の役目を果たした。鞆が発明されるまで人間ポンプであった。この時代は女性も鉄山に参画していた。</p>	<p>③</p>  <p>吹子たたらが長い間、継続され、鞆の発明で画期的に「たたら製鉄」が発展した。鞆の出現により金屋子信仰が発祥し、女人禁制の職場となった。</p>	<p>④</p>  <p>凡そ300年前に天秤鞆が発明され、永代たたらと称されるようになった。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



本柱4本、外柱32本、桁4本、中桁2本、登り桁16本、外桁16本、貫34間、合掌8本。とある。このことから、桂迫鉦の吹小屋は9間四方で四隅が丸打ちであったことが判明した。普通9間四方だと外柱が36本を必要とするところが、この鉦所は外柱が32本である。角打ちの場合と比べて4本少ないということである。

これら一連の詳細資料は、「波佐地方における『たたら製鉄』と地域経済」(PDF版)、インターネット上で公表しているので参照願いたい。 <http://www.hazaway.com/>